

## 今週の為替相場見通し(2022年12月5日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		133.62 ~ 139.89	134.34	132.50 ~ 136.50
ユーロ	(ドル)		1.0290 ~ 1.0545	1.0541	1.0250 ~ 1.0700
(1ユーロ=)	(円)		140.79 ~ 144.97	141.53	138.50 ~ 144.00
英ポンド	(ドル)		1.1900 ~ 1.2311	1.2293	1.1900 ~ 1.2400
(1英ポンド=)	(円)	*	164.05 ~ 168.27	165.00	162.00 ~ 168.00
豪ドル	(ドル)		0.6641 ~ 0.6847	0.6794	0.6700 ~ 0.7000
(1豪ドル=)	(円)	*	91.14 ~ 93.85	91.25	90.00 ~ 93.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 松永 裕司

(1)今週の予想レンジ: 132.50 ~ 136.50 円

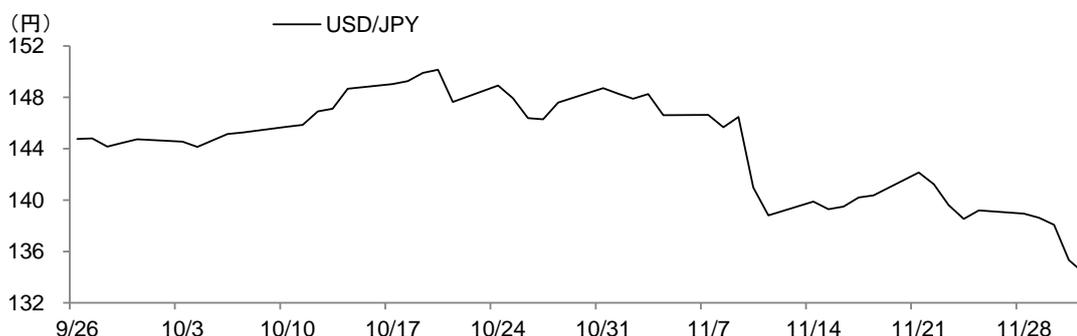
## (2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週後半に急落した。週初28日、139.35円付近でオープンしたドル/円は中国のゼロコロナ政策に対する抗議活動や株式市場の軟調推移にリスク回避の円買いの動きが散見、137円台半ばまで下落。その後は複数のFRB高官によるタカ派的な発言に138円台後半まで反発した。29日、ドル/円は仲値にかけて本邦輸入企業の実需のドル買いから139円台前半まで上伸も、中国当局の不動産業界への支援策発表を好感しドル売りが加速、137円台後半まで反落。その後は米11月コンファレンスボード消費者信頼感指数の良好な結果に138円台半ばまで持ち直した。30日、ドル/円は欧州時間までは138円台後半での小動きも、米国時間に入ると米7~9月期GDP(改定値)が速報値から上方修正されたことを受け、一時週高値の138.89円まで上昇。ただ、その後のパウエルFRB議長の利上げペース減速を示唆したハト派的な発言に137円台後半まで急落。1日、ドル/円は前日海外時間のドル売りの流れが継続し軟調に推移。海外時間もその流れは変わらず、米10月PCEコアデフレーター、米11月ISM製造業景気指数の冴えない結果に135円台前半まで続落。2日、軟調な動きが継続し欧州時間には一時週安値となる133.62円まで下落。その後、米11月雇用統計で非農業部門雇用者数が予想を上回る一方、平均時給の伸びが予想比拡大したことを受け、ドル買いの優勢となったが、上値は重く134.34円まで戻して越週した。

今週のドル/円相場は上値の重い展開を予想する。先週注目された米11月雇用統計は、非農業部門雇用者数が予想を上回る強い内容となり、公表後ドル高が進行したが、引けにかけて上げ幅を縮小。利上げペース鈍化への思惑から上値の重い動きが継続する。今月14日(水)のFOMCを前に、引き続きFRBによる利上げペース鈍化が意識されやすく、経済指標の結果が景気後退やインフレ鈍化を意識させる内容となる場合、ドル売りで反応しやすい状況が続く。5日(月)に米11月ISM非製造業景気指数が公表される。10月は54.4と9月から▲2.3ポイント低下したが、製造業の10月、11月と軟調な結果と比較すれば持ちこたえていると言える。11月の予想は53.3と10月から小幅の悪化を見込むが、下振れた場合のドル安の加速には警戒したい。そのほか、9日(金)には米11月生産者物価指数、米12月ミシガン大学消費者マインド(速報)が公表予定。インフレ緩和の兆候が確認できるかに注目したい。

## (3)先週までの相場の推移

先週(11/28~12/2)の値動き: 安値 133.62 円 高値 139.89 円 終値 134.34 円



## 2. ユーロ

市場営業部 為替営業第一チーム 原田 和忠

(1) 今週の予想レンジ: 1.0250 ~ 1.0700 138.50 ~ 144.00 円

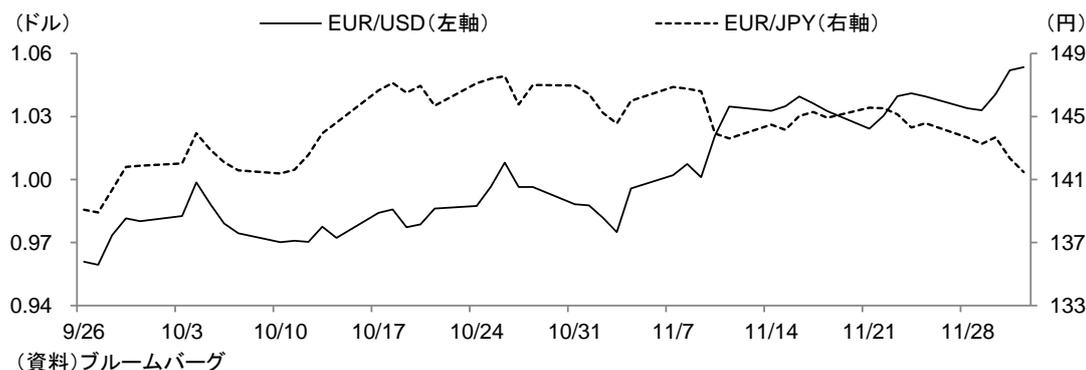
### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は乱高下、値幅を伴いながら週後半に急伸した。週初28日、1.0370付近でオープンしたユーロ/ドルは米金利低下に伴うドル売りに1.05ちょうど手前まで急伸も、NY時間ではポジション調整の動きやFRB高官の相次ぐタカ的な発言にドル買いが強まり1.03台前半まで値を崩した。29日、ユーロ/ドルは欧州株の堅調推移や米金利低下に伴うドル売りにサポートされて1.03台後半まで値を上げた後、海外時間では独11月消費者物価指数の不冴えな結果に1.03台前半まで反落した。30日、ユーロ/ドルは米経済指標の良好な結果にドル買いが強まり、一時週安値の1.0290まで値を下げたが、その後パウエルFRB議長のハト派的な講演内容にドル売りが強まり、1.04台前半まで急上昇した。1日、ユーロ/ドルは複数の米経済指標の軟調な結果や米長期金利低下に伴うドル売りが支援材料となり、1.0534まで急伸した。2日は、米11月雇用統計の結果を受けて1.0430まで下落。しかし、ドルが買い戻される流れは長続きせず、徐々に下落分は全て巻き戻され、結局1.0541で越週した。

今週のユーロ相場は上値の重い推移を予想。ウクライナ情勢やエネルギー供給不足等の懸念を抱えるユーロが買われにくい地合いが続くだろう。欧州のエネルギー供給問題については、12月の本格的な冬の到来により、エネルギー消費が増加することで顕在化するとみられる。欧州の経済指標をみると、エネルギーに影響を受けやすいセクターが減速傾向を示しており、インフレ率の高止まりが家計を圧迫することは確実だ。エネルギー供給問題が欧州圏内の不透明感を高めており、ともすればスタグフレーションに陥る可能性もある。ECBのチーフエコノミストであるレーン理事は、エネルギー供給問題が高インフレや景気減速につながっていると考え、エネルギー供給問題というサプライサイド側の要因は徐々に解消され、来年にはこのエネルギー主導のインフレは落ち着くと予想している。ただし、それも来年に入ってから議論であり、足許は欧州圏内の不透明感は一つもぬぐえていない。他方、米国の利上げスピードは鈍化すると見込まれるものの、利上げの最終到達点はまだ先になることから、ドルのユーロに対する優位性も変わらないだろう。利上げによる景気減速不安は欧州及び米国ともに抱える不確実要素であり、エネルギー供給問題やウクライナ情勢という不確実性をさらに抱えるユーロにポジションは傾けにくい。よってユーロの上値は限定的となり、パリティ近辺での軟調推移を予想する。なお、今週は5日(月)にユーロ圏11月サービス業PMI(確報)、6日(火)に独10月製造業受注、7日(水)独10月鉱工業生産、ユーロ圏7~9月期GDP(確報)の発表が予定されている。

### (3) 先週までの相場の推移

先週(11/28~12/2)の値動き: (対ドル) 安値 1.0290 高値 1.0545 終値 1.0541  
(対円) 安値 140.79 高値 144.97 終値 141.53



### 3. 英ポンド

欧州資金部 神田 史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.1900 ~ 1.2400 162.00 ~ 168.00 円

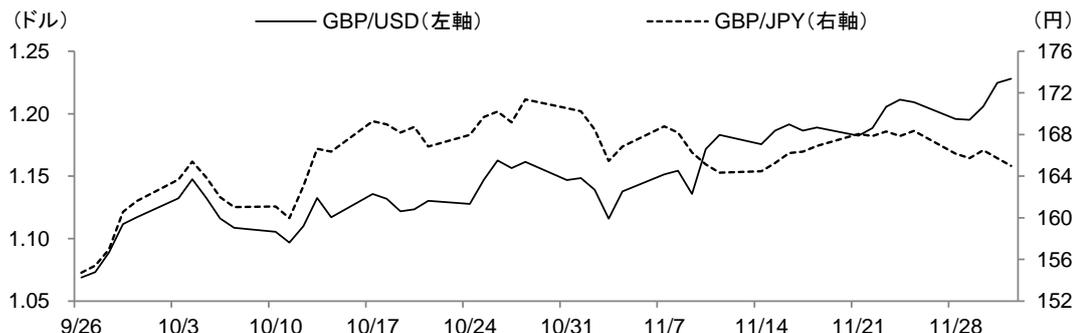
#### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は上昇。週初28日は、対ドルで1.20台半ばで始まる。中国関連のヘッドラインでややドル高気味であったが、独金利上昇でユーロが動いたのにつれてポンドも欧州時間に1.21台まで反発するも結局米国時間に1.19台半ばへ押される。翌29日も同様な動きで方向感なし。月末30日はじり高で1.20台を回復もやや堅調な米経済指標にドル買いとなると1.19台前半へ再び下げる。しかし、パウエルFRB議長が12月FOMCにおける0.5%利上げの示唆を行いドルが売られると1.20台後半へ反発。翌1日はドル安地合い継続。弱い米経済指標も相まって一気に1.23台へ続伸。2日は1.22台後半で始まるが、米11月雇用統計が堅調な結果となるとドルが買い戻され1.21台へ下落も、結局1.22台後半へ買い戻されて越週した。一方で対円では円が強含んだことから週を通して上値重い推移。日中の変動が2円以上に及ぶ日も多くボラティルな地合いは継続。週初168円台で始まったが、週末2日には一時164円台まで下落した。

今週の英ポンド相場は、下方リスクを警戒しながら、ドル弱含みを背景とした堅調推移を見込む。翌週14日(水)にはFOMC、15日(木)にはBOE会合を控え、経済指標に一喜一憂しながらもトレンドが変わるまでは想定しない、というのが基本シナリオ。ただ英経済の停滞を鑑みるとここ(9月末の混乱時からすでに20%弱反発)からさらにポンドを買い進めるのにはやや疑問符がつく。2日の米11月雇用統計のような強めの米経済指標が続くことによるドルの買い戻しからの下方リスクには注意したいが、主要経済指標がそれほどあるわけでもなく、あくまでリスクシナリオか。オプション市場で観測されるインプライド・ボラティリティは、対ドルでの1週間の値動きをおよそ1.5%程度と見込んでいる模様。また引き続きプットオプション(ポンドを売る権利)がコールオプション(ポンドを買う権利)よりも高く取引される状況は変わらないが、1週間の短期ターム物ではほぼ均衡に近づいており、中銀イベントを控えやや方向感の出にくい1週間を見込んでいるようだ。

#### (3) 先週までの相場の推移

先週(11/28~12/2)の値動き: (対ドル) 安値 1.1900 高値 1.2311 終値 1.2293  
(対円) 安値 164.05 高値 168.27 終値 165.00



(資料)ブルームバーグ

#### 4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 西 拓也

(1) 今週の予想レンジ: 0.6700 ~ 0.7000 90.00 ~ 93.00 円

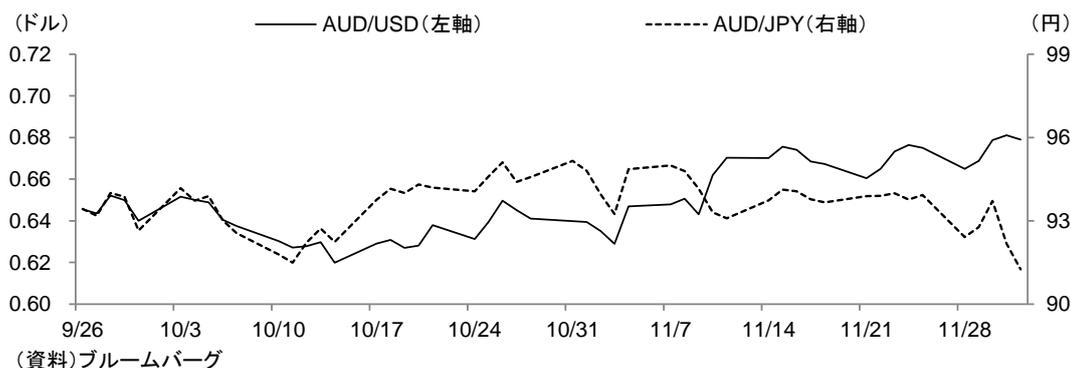
##### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は下に往って来いで推移。週初28日、中国のゼロコロナ政策に対する抗議デモを背景にギャップダウンし、0.6732でオープン。軟調なアジア株や今年初のマイナスとなった豪10月小売売上高を背景に、0.6666まで下落。NY時間にはFRB高官の相次ぐタカ派発言にドル買いが強まり、0.6642まで下落。29日、中国がコロナ対策を巡り会見を行うとのヘッドラインに、規制緩和への期待から中国株が上昇する流れに0.67台へ乗せ、NY時間には0.67台半ばまで上昇。その後一服し0.66台後半まで値を下げた。30日、豪10月消費者物価指数(CPI)では前月比・予想比で下振れたことでインフレ減速が示唆され、0.6670まで弱含むも、NY時間のパウエルFRB議長講演を控え市場でFRBの利上げ減速の思惑が広がる中、0.67台へ乗せた。注目のパウエルFRB議長講演では12月の利上げペース減速の可能性に言及したことで米金利が急低下しドルが売り込まれる流れに、豪ドルは0.67から0.68まで約100pips上昇した。1日、0.6800を挟むレンジ相場となった。NY時間には米10月PCEコアデフレーターや米11月ISM製造業景気指数が弱含みドル売り優勢となる中、底堅く推移。2日、米11月雇用統計が予想を上回ると、ドル買いが進み0.6743まで下落。売り一巡後は、米利上げペース減速期待が後退するほどの内容ではなかったことから0.6794まで上昇し、越週した。

今週の豪ドル相場は堅調な推移を予想する。先週はパウエルFRB議長による利上げペース減速を示唆する発言や予想比下振れた米経済指標を背景に、米国のインフレピークアウト感及び、利上げペース減速の織込みが進み、米金利低下・ドル売り地合いとなった。予想比上振れた米11月雇用統計も流れを変えるような材料とはなっていない。今週も、米豪間の金利差縮小が豪ドル上昇のサポート材料となりそうだ。また今週は6日(火)の豪金融政策決定会合を控えている。直近25bpの利上げペースを維持しており今回も25bp利上げが織込まれているが、11月分のRBA議事要旨で50bp利上げも選択肢の1つであったことや先週の豪10月CPIが未だ+6.9%(前年比)と高水準であることを踏まえれば大幅利上げの可能性も残されており、上振れた場合は豪ドル買い材料となる。一方、中国でのゼロコロナ政策に対する抗議デモ拡大及び中国当局の対応次第では、経済的関係性の強い豪州経済のセンチメントを悪化させ、豪ドル売りに繋がる可能性もあるため、中国関連のヘッドラインにも注意が必要だ。

##### (3) 先週までの相場の推移

先週(11/28~12/2)の値動き: (対ドル) 安値 0.6641 高値 0.6847 終値 0.6794  
(対円) 安値 91.14 高値 93.85 終値 91.25



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。